



義肢装具士のみなさんに、 義肢・装具のことを 色々教えてもらいました



義肢・装具について教えてくれたのは、施設で働く義肢装具士の方たちです。義肢装具士は、一人ひとりに合う義肢・装具を一から製作するだけでなく、リハビリ中のメンテナンスからアフターケアまで長い期間にわたって利用者の方をサポートします。

製作過程を見学!

豊富な知識と
プロの技が必要なんだね!



▲ギプス包帯を使って切断部の型を取り、足の形に合わせて細かく調整していきます。骨折をしたときなどにも使われるギプス包帯は、包帯を石膏で固めたもの。手に持ってみると意外と重い!



▶石膏の型をもとに、プラスチックやアクリル樹脂でソケットを製作します



▲ソケットは義足の人の体重を支える重要なパーツです

スポーツ用義足ポイント①

パラリンピックや障がい者スポーツ大会などでは、多くの選手がスポーツ用義足を使っています。走行時は体重の8倍以上の負荷がかかるので、それを支えるソケットにはアクリル樹脂やカーボン繊維が使われます。

歴史を学ぶ!

こんなにオシャレな
義足もあるんだね!

施設には、昭和初期に製作された義肢・装具から最先端のものまでを展示。義肢・装具がどのように進化してきたのかが分かるのはもちろん、日常用義足とスポーツ用義足の違いも学ぶことができます。

▼実物の義足や義手を手に取るジュニア記者。アスリートが使用するスポーツ用義足も展示されています



木村真翔くん

昔と比べると、義肢・装具の
技術も進化しているんだね



スポーツ用義足ポイント②

陸上選手が使うスポーツ用義足は、カーボン製の板パネの反発力によって前に進みます。走ったり跳んだりする動きを可能にする、独特の形状が特徴です。



レジェンド義肢装具士の 白井二美男さんに 話を聞きました



Profile

日本で初めてスポーツ用義足を製作。シドニーパラリンピック、アテネパラリンピックには日本代表選手のメカニックとして同行しました。スポーツ義足の第一人者として、障がい者スポーツの発展に貢献しています。

リハビリテーション室を訪問。 義足体験へ

義足で歩くのは
かなり難しいんだね

義足で歩けるようになるには、3か月～半年ほどのリハビリが必要だと言われています。それをサポートするのは、リハビリの専門家である理学療法士です。施設の中には診療所もあり、義肢装具士、理学療法士、医師など医療のプロたちが連携して利用者の方を支えています。



▲ジュニア記者がスポーツ用と日常用の義足を体験しました。日常用義足のポイントは、かかとから踏み出すこと。手すりにつかまっても「怖い!」と声が出てしまうほど、バランスを取るのが難しい!

スポーツ用義足ポイント③

義足での歩行よりもさらに難しいのが、スポーツ用義足での走行です。義足で走ったり跳んだりするには、高い身体能力と努力が必要! ジュニア記者は両足にスポーツ用義足を装着して、歩いてみました。

義肢・装具で変わる 生活 日常 表現



義肢・装具は今、技術の進歩でとても扱いやすくなっています。義肢を使う人たちの中には、アイドル活動やモデルなど、あえて義肢を見せることで個性を表現している人たちもいます。義肢・装具の進化により、利用者の方の生活や日常はこれからもっと変わっていくでしょう。



◀義肢装具士さんに、義肢の表現者の方たちについて説明してもらいました



▲陸上競技だけでなくダンスや武道など、義肢により日常生活の幅が広がります



▲義肢を“見せる”ことは“魅せる”ことにもつながっています

公益財団法人 鉄道弘済会 義肢装具サポート センターご案内

〒116-0003
荒川区南千住4-3-3
☎(5615)3313



Q どんなときにやりがいを感じますか?

A ものづくりをして、さらに利用者の方の役に立てるとこの仕事のやりがいだと思います。頭も手も使うし、医学的な知識も必要とされるので大変ではあるけれど、面白いですよ。

Q この仕事をしていて良かったと思う瞬間は?

A 義足の子が走れるようになって陸上部に入ったとか、今までできなかったことができたという話を聞くのが一番嬉しいです。利用者の方の中には、走ることを諦めてしまっている人も多い。でも、走れるようになるとみんな「風を感じられて気持ちいい!」と言います。

Q 義肢装具士の仕事で一番難しいことは何ですか?

A 切断した部分のことを専門用語で「断端」と言いますが、断端は人によってまったく違います。皮膚が薄いなどの理由で傷つきやすい断端の方は、義足を使っているうちに出血することもあり、調整がとても難しいです。